

藤原宰太郎探偵小説選  
目次

密室の死重奏<sup>カルテット</sup>

\*

千にひとつの偶然

日光浴の殺人

白い悪徳

ミニ・ドレスの女

血ぬられた 112

停電の夜の殺人

コスモスの鉢

手のひらの名前

密室の石棒<sup>せきぼう</sup>

346 314 286 278 229 198 175 157 147 2

まえがき（日本文芸社『5分間ミステリー』）……………

386

『グリーン家殺人事件』……………

387

リヤカーのおじさん……………

388

収録作家に訊く……………

389

白い小石……………

390

本格推理のトリックについて……………

392

密室悲観論……………

393

インタビュー

推理小説と歩んだ半世紀……………

394

【解題】 呉明夫……………

417

## 凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」(昭和六一年七月一日内閣告示第一号)にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

# 創作篇

---

「密室の死<sup>カルテット</sup>重奏」において、マイケル・ボイヤー「ドアの死角」のトリックが明かされています。ご注意ください。

---

## 密室の死重奏<sup>カルテット</sup>

### 第一章 異母姉

#### I

まくら元で、電話が鳴った。久我京介は寝返りをうって、布団から手をのばして受話器をつかんだが、頭の中は、まだ夢うつつの状態だった。

「もしもし、久我さんのお宅ですか？ あの、ミステリー研究家の久我先生の……？」

中年らしい女性の声だった。

「ええ、そうですか……」

「そちらへ、西川明夫がおじやましていますんでしょ

うか？ わたしは明夫の母親ですが……、いつも明夫がお世話になっています」

「ああ、西川君のお母さんですか。どうも初めまして……」

広島からの長距離電話らしいので、思わず、久我は布団の上で起きあがった。目ざまし時計をちらっと見ると、正午に近かった。窓のカーテンに、晩春というより、もう初夏を思わせる陽光がいっぱいさしている。

「さっき明夫のアパートに電話したら、留守だったのでもしかしたら、先生のところにおじやましてるのかと思ひまして……。今日は日曜日で、大学も休みですし……」

「西川君はまだ来ていませんが、なにか急用でも？」

「いえ、べつに急用というほどじゃありませんが、もし明夫がそちらに行きましたら、わたしのところへ電話するよう伝えてくださいませんか……」

彼女はそう頼んでから、息子が久我の世話になっていることのお礼をながながと述べて、やっと電話が切れた。律義なおふくろさんだな。世話になっているのは、むしろ、こちらのほうなのにと、久我は苦笑しながら、受話器をおいた。

彼は、目下、ライフ・ワークの意気込みで『トリック

『百科事典』を執筆中だった。その資料の収集や原稿の整理に追われて、毎月おびただしく出版されるミステリーの新刊本や雑誌などを丹念に読んでいる時間がない。そこで、その代読を大学生の明夫に安いアルバイト料で頼んでいるのだった。

彼が明夫と知り合ったのは、去年の秋だった。W大学のミステリー研究会の学生たちが彼の家に押しかけてきて、〈名作ミステリーのトリック解剖〉というテーマで、文化祭の講演を依頼した。なにごととも人前に出るのがきらいな久我は、もちろん、即座にことわった。無愛想にことわられて、話のつぎ穂<sup>ほ</sup>を失った学生たちは、書齋の外の廊下<sup>りや</sup>にまであふれている蔵書を興味ぶかげに眺めて、「先生は、これをぜんぶ読破されたんですか？ すごい読書量だな」と、感心する。

「とんでもない。半分はツンドクだよ。年とともに、読書のスピードが落ちてね。まして食うためには、原稿を書かなければならないから、そっちのほうに時間を取られて、とても毎日、本ばかり読んではおれないよ。ほかの代わりに、だれか読んでくれる者がいたら、アルバイト料を払ってもいいよ」

久我が冗談めかして言うと、

「でも、他人が読んだんじゃ、先生ご自身の役には立たないでしょう」

「ぼくは評論家じゃない。ただのトリック収集家だからね。読んだあと、トリックだけを抜き出して、ぼくに教えてくれたら、それでいいのさ」

「じゃ、ぼくがやります。好きなミステリーを読んで、お金がもらえるなら、最高だな」

と、後輩らしく、後ろのほうに控えていた学生が、急にひざをのり出した。

「えっ、きみが……?」

「ええ、ぜひやらせてください。ところで、先生、一冊につき、読書料はいくらですか?」

「そうだな。単行本なら、定価の倍、出そう」

「文庫本は安いから、あまり割りに合わないな」

彼はがっかりしたようにつぶやいて、後ろの本棚から古ぼけた本を一冊ぬき取ってみて、

「あれ、この定価は、たったの百九十円だ。なんだ、三十年も昔の本だ」

「じゃ、どの本も一律に、一冊につき二千円でどうかね? ただし、読んだ本のトリックは、かならずノートにメモしておいてくれたまえ。それが条件だ。あとで、分類カードに整理しておく必要があるのでね」

「いつそのこと、コンピュターにインプットしたら、どうですか」

と、幹事役の学生がいう。

ともあれ、その後輩の学生は、さつそく外国ものの推理小説を五冊ほど借りて帰っていった。それが西川明夫だったのである。

それから毎週、三、四冊くらい読んで、短いレポートもきちんと書いてきた。わずかなアルバイト料だったが、ミステリー狂の彼は、久我のところに出入りして手伝うのが楽しそうだった。そればかりか、やもめ暮らしの久我のために、ときどきは食事の支度や洗濯まで無料奉仕してくれる。まったく、ありがたい助手兼家政夫である……。

久我京介はパジャマ姿のまま、朝刊をもってトイレに入った。便器にすわって、新刊書の広告欄に目を通して、いと、玄関のチャイムが鳴って、

「先生、もう起きていますか?」

と、明夫が声をかけて入ってきた。

玄関のドアは、さつき朝刊を取りに行ったとき、明夫が来そうな予感があったので、鍵をはずしておいたのだ。

「いま、トイレだ。すまないが、コーヒーを沸かしてくれないか」

「オーケー」

「あ、そうだ。さつき、きみのお母さんから電話があったよ」

「えっ、おふくろから? なんの用だろう」

「折り返し、電話をくれとおっしゃっていた。急用かもしれないから、すぐかけてみなさい」

「じゃ、電話を借ります。長距離ですが、いいですか?」

「遠慮はいらん」

新聞のスポーツ欄にも目を通して、久我がトイレから出てみると、明夫はキッチンでコーヒーの支度をしていた。

「もう電話はすんだのか。なにか悪い知らせでも?」

「いえ、たいしたことじゃありません。姉のマンションに行って、ちょっと様子を見てきてくれと言うんです。ゆうべから連絡がとれないらしいんです」

「東京に、きみの伯母さんがいるのか」

「いえ、おふくろの姉じゃなく、ぼくの姉貴です」

「だって、きみは一人っ子なんだろう」

たしか、これまで明夫から断片的に聞かされた話では、母子家庭の一人っ子で、母親は広島市でスナック店をやっているということだった。

「姉とはいっても、腹ちがいの姉なんです」

明夫はサイホンのコーヒーを久我のカップにつきながら、

「じつは、ぼく、俗にいうメカケの子なんですよ」

と、目に微笑をうかべて、あつさり言った。

久我は、虚をつかれた感じで、返す言葉がなかった。

「姉のほうが本妻の一人娘で、明和大学の四年生です。こちらは六畳一間の安アパート暮らしなのに、向こうは分譲マンションの3LDKでリッチな生活ですからね。

人種隔離差別政策もいところだ」

「それで、ふだん、きみたちはつき合っているのかね？」

「東京に出てきてしまえば、親の干渉がありませんからね。金に困ったら押しかけて行って小遣いをせびったり、めしを食わしてもらっていますよ」

「結構、弟思いの姉さんじゃないか。お父さんは健康在なかね？」

「ええ。でも、ぼくはめつたに会いません。そのおやじが、あす商用で急に上京することになったので、昨夜から何度も姉貴のところへ電話したらしいが、今朝になつても電話が通じないので、心配して、ぼくのおふくろに頼んで、ぼくに様子を見に行つてくれと言うんです。

おやじが上京するときは、ホテル代わりに姉のマンションに泊まるんです」

「なるほど、それで女子大生のくせに、ぜいたくなマンション暮らしか」

「たぶん、クラブ活動の二次会で、友だちのところを外泊してと思うんです。ゴルフ同好会に入っているんですが、明和大学のことだから、どうせお遊びのクラブですよ。でも、外泊したことがばれたら、おやじに大目玉をくうだろうな」

そうつぶやいて、明夫はコーヒーを飲みほした。

明和大学は、偏差値こそB級だが、上流志向型の家庭がわが子を入れたがっている有名ブランド校である。戦前は女子大学だったので、いまでも良家のお嬢さん学校のイメージが強い。

「先生、今日の予定は？」

「べつに急ぎの原稿はないよ」

「じゃ、散歩がてら、いつしよに行きませんか。五月晴れだし、たまには外出しないと、運動不足になりますよ。もう何日、外に出ないんです？」

「一週間になるかな。ゴールデン・ウィーク中も、ずっと家にいたし」

「道理で、冷蔵庫の中はからっぽですよ。散歩ついで

に、食料品を買ってこないと、餓死しますよ」

だが、出無精の久我は、パジャマを着替えるのが面倒くさかったので、

「いや、やめとこう。昼は、そば屋の前でも取るさ。きみはほくにかまわず、早く行きなさい。おふくろさんが返事待っていなさるんだらう」

明夫はシオルダーバッグから推理小説を三冊出して、久我に返した。

「先週は六大学のミステリー研究会の合同コンパがあって、これだけしか読めませんでした。めぼしいトリックはなかったな。列車の時刻表を使った陳腐なアリバイ崩しと、カチカチに冷凍した魚を撲殺の凶器に使うトリックです。これも、よくある手ですね」

と、メモしてきたレポート用紙を渡した。

「時間の無駄だったか。それじゃ、今週は外国ものを頼むよ」

久我は書齋から翻訳ミステリーの新刊本を数冊とってきて、ついでに代読のアルバイト料を封筒に入れて、明夫に渡した。

「帯の広告文を見ると、本格ものらしいから、こんどは菌ごたえがあるかもしれんよ」

「合同コンパで、先生のこと話題になりましたよ。」

トリック百科事典はいつ完成するのか、みんな期待しています」

「おいおい、あれは、あまり公表しないでくれ。いつ完成するか、ほくにも目どが立たないんだから」

明夫は本をシオルダーバッグにしまうと、自分が飲んだコーヒー・カップをきちょうめんに洗ってから、

「それじゃ、ちよつと目白台ハイツへ行つてきます」と、そうそうに帰っていった。

久我は食器戸棚に古いクッキークッキーの残りがあるのを思い出すと、それをコーヒーにひたして、昼食代わりに食べはじめた。ものぐさなやもめ暮らしたから、胃袋さえ満たされたら、どんな粗食にも耐える習慣が身についているのだった。

## II

目白台ハイツは、茶色の化粧レンガで外装した八階建てのマンションである。

ここの玄関を通って、エレベーターに乗るたびに、西川明夫は、日当たりの悪い自分の安アパートと比べて、腹立たしい気持ちになるのを抑えきれなかった。

まえがき（日本文芸社『5分間ミステリー』）

推理小説の楽しさは、五分の四まで読者をトリックの迷路にさそいこんでおいて、あとの五分の一で、タネをあかし、それまでの推理を全部ひっくり返して、読者の頭を徒労させることにあります。それは快い徒労です。けれども、そんな頭脳の浪費をのんびり楽しむには、現代は万事が、あまりにもスピーディな世の中です。ですから、ともすれば、途中のページを読みとばして、せつかちに、最後の絵解きだけを早く知りたがります。無理ありません。生活のテンポが早い、インスタント時代ですから。

そんな気ぜわしい現代人のために、なくもがなの無駄な枝葉を切りとって、トリックと推理のエッセンスだけを抜きだして、シヨート・シヨートに濃縮した、ミステリー掌篇を集めたのが、この本です。

六十九篇、どれも小粒ながら、長篇に劣らぬミステリーの醍醐味を、たっぷり味わっていただけだと思います。奇想天外な殺人トリックもあれば、推理の盲点をついた解決の意外性もあり、犯人探しの謎解きなど、バラエティーに富んでいます。

たとえてみれば、推理小説の、チョコレート・ボンボンの詰め合わせセット、それが本書です。

夢中になって一気に読み終えるのも結構ですし、また、朝のトイレの中や、通勤電車の中で、たいくつなテレビのコマーシャルのあいまに、あるいは就寝前の寝酒のかわりに、一つか二つずつ、読み惜しみしてください、なお結構です。

あなたの推理力は、日ましに、すばらしくなります。そればかりでなく、この本一冊で、推理小説の通にもなれます。

恋人とデートしたとき、ためしに一席ぶつてごらん下さい。たちどころに、あなたの株はあがります。なぜなら、推理小説は現代人に欠かせない教養ですからね。

もし幸いにも、この本が歓迎されたら、さらに続篇、続々篇を書いてゆきたいと思っています。

## 『グリーン家殺人事件』

ミステリーの第一期黄金時代を代表する名作である。私がこれを読んだのは、中学二年のときだった。

ちょうど終戦の年の夏で、叔父が空襲で焼ける前に大阪から送ってきた疎開荷物の中に、古い世界探偵小説全集があつて、夏休みの退屈まぎれに、その中から最初に抜き出して読んだのが、この本だった。

そして、これ一冊で、たちまちミステリーの魅力のとりこになって、そのあと全集を全部読み終わったときは、もう、完全な中毒患者になっていたのである。

戦前の総ルビつきの本で、いまの翻訳の水準と比べたら、ひどく粗雑な抄訳だったにちがいないのだが、しかし、それでも名探偵ファイロ・ヴァンスが殺人事件の謎を理路整然とといていく推理の精密さに、頭がくらくらするような知的快感をおぼえた。

犯行現場の見取り図が教枚そえてあつたのも、子供の目には魅力的で、まるで幾何学の図形を見ながら難解な証明問題に挑戦しているような興奮があつた。

それに、各章の終わりにペダンチックな脚注がついているのも、はじめて大人の小説を読破したという満足感があつて、そのときの感動が五十年たったいまも飽きずに、おそらく死ぬまでミステリーを読みつづける原動力になっているのだ。

多様性に富んだ現代ミステリーと比べたら、戦前の作品だから、ストーリーの展開にやや単調なきらいはあるが、しかし、トリックの着想の奇抜さと、謎をとく推理のひらめきは不滅のもので、これこそがミステリーの根幹をなすのである。

叔父の疎開荷物は、父母には置き場に困る邪魔物だったが、私には宝の山だったのである。

[著者] 藤原宰太郎 (ふじわら・さいたろう)

1932年、広島県尾道市生まれ。本名・宰 (おさむ)。早稲田大学露文科を卒業後、病気療養中に国内外の推理小説を読みあさった。『探偵倶楽部』へ短編を投稿しながら、テレビドラマの台本も執筆。68年刊行の『探偵ゲーム』と72年刊行の『世界の名探偵50人』がベストセラーとなり、以降、トリック紹介本を多数刊行し、推理小説トリック研究の第一人者となる。漫画雑誌やスポーツ新聞から依頼された推理クイズの執筆と平行し、書下ろし作業も精力的にこなした。86年、初の書下ろし長編『密室の死重奏』を刊行。一時的な休筆期間を経て、2005年より藤原遊子名義で創作活動を再開したが、2008年に脳梗塞を患い断筆し、執筆活動を終了した。

[解題] 呉 明夫 (くれ・あきお)

1965年、広島県生まれ。都内の大学を卒業後、不動産業を経て現在は建築会社に勤務。藤原宰太郎氏とは25年近く交流がある。

ふじわらさいたろうたんていしょうせん  
藤原宰太郎探偵小説選

[論創ミステリ叢書 113]

2018年5月20日 初版第1刷印刷

2018年5月30日 初版第1刷発行

著者 藤原宰太郎

装訂 栗原裕孝

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

印刷・製本 中央精版印刷

©2018 Saitaro Fujiwara, Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1701-9